



公立大学法人

静岡文化芸術大学

琥珀 石の風

SUAC
広報誌

Vol.18

2024 春号



ラッパと まちづくり

教授×在学生クロストーク／
浜松まつり各町風印編

// SUAC TOPICS //

「第86回新制作展」で卒業生が新作家賞受賞
二本松ゼミ、浜松市長の懇談会に参加
遠鉄百貨店に学生がプロモーション提案
4年間の集大成！「卒展」を開催

Featured topic

教員研究紹介

ライフコース研究で
障害福祉に貢献

文化政策学部文化政策学科
小林淑恵 准教授

ラッパとまちづくり

浜松のラッパコミュニケーション

教員 × 在学生 クロストーク

毎年5月3日～5日に行われる浜松まつり。市民の方にはおなじみの風物詩といえるラッパの音ですが、実はラッパのお囃子のお祭りは世界的にも珍しいことはご存知でしょうか？今回は、浜松のラッパに魅了された奥中康人教授と、大学院生、学部生によるラッパのお話をお届けします。



取材協力：浜松市楽器博物館

私が浜松に来た理由

奥中：SUACに勤めて13年になりますが、浜松まつりには20年ほど前から調査で訪れています。当時の私は日本の近現代音楽史に興味がありました。ピアノやバイオリンの研究者はたくさんいますが、ラッパの研究者はほとんどいなくて、同じ大学院に浜松出身の後輩がいて、「地元はラッパ吹いてますよ」なんて言っただけで、ラッパを吹く祭りなんて聞いたことがなかったので、半信半疑で見に行ったら本当に吹いていて笑。

柴田：お囃子にラッパを使うお祭りは他にはないのですか？

奥中：なくはないんですけど、長年行われているちゃんとしたお祭りでは世界的にも珍しいですね。そこから毎年浜松まつりに来るようになって縁あってSUACに赴任することになりました。現在は居住地の町と、昔からラッパを吹かせてもらっている早出町と、それぞれの法被を時間帯ごとに着替えて参加しています。

柴田：私は大学で哲学を学びたいと考えていました。それは別に音楽が好きなんですけど、音楽を学ぶという演奏をするのだと思っていて、哲学と結びつけて音楽を学べると知り、直感もあって進学先を選びました。私はブルースが好きなんです。サブスクにない戦前の黒人ブルースを探して聴いています。入学式の数日後に奥中先生の研究室を訪ねました。「ラッパ興味ある？」と聞かれました。先生の紹介で、私も早出町のラッパ隊に参加することになったんです。

坪内：入学してすぐ、地元のお祭りの独特の雰囲気の中に入ってしまったんですね。

柴田：はい(笑)。

坪内：私は国立音楽大学で民俗音楽を学び、新潟市の「樽站(たるきめた)」という、樽を太鼓のようにバチで叩く芸能を卒業研究にしました。音楽そのものだけではなく

P.01 Pick Up Student

P.02-04 [特集]ラッパとまちづくり
教授×在学生クロストーク

P.05 SUACさんぽ 浜松まつり各町風印編

P.07-09 SUAC TOPICS

P.10 教員研究紹介vol.10 小林淑恵 准教授

P.11-12 キャリア支援室より

P.13 退任教員紹介

P.14 同窓会だより

チームで作上げた舞台 夢の実現へ大きな自信に

— pick up student —



八木 更紗さん

デザイン学部 デザイン学科2年
静岡県立島田高校出身

舞台芸術に興味をもち、デザイン学科に進学。SUACには舞台美術や設計を専門に学ぶ授業はありませんが、デザインを多角的に学んだり、教員のアドバイスを得たりしながら、視野を広げています。入学後は舞台の音響照明の知識や技術を学ぶSUACならではのサークル、音響照明技術研究会「P@tch-code(パッチコード)」に所属しました。大学主催行事や学生主体で行われるイベントなどで照明を担当して、さまざまなステージを経験しています。ひとつの舞台を作り上げる上での裏方スタッフのやりがいと責任、そして成功したときの達成感。舞台は出演者だけでは成り立たず、多くの人がチームとなって完成することを学んだといいます。



◀終演後に記念撮影。俳優の皆さん、スタッフが丸となって作り上げる舞台でした。



▲地元学生と劇団たんぼぼのコラボレーション「ALLはままつ公演」として上演された「和尚さんと小僧さんの昔ばなし」(2024年1月27日開催、浜松市勤労会館 Uホール)。舞台美術は八木さんのデザインをもとにSUACの学生で制作されました。少ない予算の中で最大限の効果を出す舞台美術です。

学びの成果を活かそうと2年次になって挑戦したのが、全国の小中学校での巡回公演や演劇教育、地域貢献活動などをおこなう「劇団たんぼぼ」がおこなった舞台美術デザインのコンペでした。「劇団たんぼぼ」が上演する公演の舞台美術プラン、衣装デザイン、チラシデザイン、劇音楽を、浜松市在住・在学の高校生以上の学生を対象に募集するもので、このコンペで八木さんの提案が見事採用。2024年1月に上演された公演で実現しました。これまでは舞台美術デザインを考えるだけだったのが、上演に向けて劇団と打ち合わせを進め、自分のデザインが「形のあるもの」になったことは、八木さんの大きな自信となりました。「SUACには自分の将来の夢や、やってみたいことに積極的に取り組む人が多い」という八木さん。そんな仲間たちと切磋琢磨しながら、自身も将来に真面目に向き合い、やるべきことに取り組んでいく姿勢が生まれているといいます。今回の舞台美術デザインの経験から、実現性のあるステージを考えるという新たな視点を学び、次の目標も見えてきました。これからも興味への知識を深めながら、将来に向かって一歩一歩進んでいきます。



坪内 香澄 さん
大学院文化政策研究科2年/
浜松市楽器博物館職員

新潟県出身。長期履修制度を利用し、働きながら大学院に通う。創作和太鼓である霧島九面太鼓(鹿兒島)と万代太鼓(新潟)を題材に、新しく作られた芸能が地域に密着していく過程を研究している。研究を仕事にも役立てたいと考える。

ラップ人口急増のきっかけ

奥中：こうして始まった浜松まつりのラップは80年代頃から吹く人が急増します。これには第二次ベビーブームが影響しています。地域の子ともたちもお祭りに参加しますが、風を揚げたり屋台を引っ張ったりする所に小さな子がいると危ないし邪魔になってしまいます。そこで子どもにラップを吹く役割を与えて、子どもラップ隊を作りました。そのちよつと前からヤマハの営業マンが浜松市を中心に金管バンドの普及に努めていました。60年代後半からヤマハは

管楽器を作り始めたんですね。浜松まつりのラップとヤマハが売り出した管楽器は無関係ではありますが、吹く人にとって親和性は高いわけです。
柴田：お祭りでラップを吹いていたら、学校の部活でも演奏したくなりそうですよね。その逆もあるだろうし、相乗効果ですね。
奥中：昔は町内に一人か二人ラップを吹く人がいれば十分でしたが、ラップ隊の結成で何十人と吹くようになりました。そうすると曲の幅も広がって楽しくなるので、子どもだけではなく大人も増えて、老若男女ラップを吹くようになったのです。町の数の増減はあるものの170前後ありますから、なかなかのラップ人口ですよ。

ラップがまちづくりに与えた影響

坪内：浜松は西洋音楽の街のイメージがずっとあったので、こうしたラップの文化は意外でした。
柴田：駅周辺は電線がなくて、ヨーロッパの綺麗な街並みですし、浜松まつりとはギャップがあるような…。
坪内：たしかに、西洋音楽のイメージは駅周辺に限られているのかも。浜松に長く住んでいる方とお話すると、コンサートなどは『まちなか』のものと言われちゃいます。
奥中：そうでしょう。『楽器の街』から『音楽の街』へ、県や市が文化政策に取り組ん



世界的にも珍しい

ラップが響く都市まつり



柴田 紬 さん
文化政策学部 芸術文化学科1年

千葉県出身。ローリング・ストーンズを入口に黒人ブルースに切り替え、そのパワーに圧倒される。入学してすぐ浜松まつり、続いて遠州大念仏にも参加。社交性の高さで、長年の市民以上に浜松の文化を満喫中。

で、オペラやオーケストラ、ピアノコンクールなどを行っています。市民のラップは少々置いてけぼりの感があります。まちづくりというと、新しいものを取り入れる方に注力しがちですけど、浜松には既に百年前から続くまちづくりのシステムがあるんですよ。子どもからお年寄りまでラップを吹く世界的にも稀で貴重な文化があることを、市民の方々がもつと自覚して活かせると思いいます。

柴田：私はラップがきっかけで浜松の人と仲良くなれました。大学やアルバイト先の友達とも違う、職業も年齢もバラバラの人たちです。ラップは『隣の人』と話すきっかけを作るツールでもあります。特定の人と話すばかりではなく、まず隣にいる人と話すことが、みんなが過ごしやすい環境づくりの大事な一歩だと思います。

音楽と社会のつながりを研究したくて、SUACの大学院に進学しました。浜松まつりのことはそれまで全く知りませんでした。去年見学して風とラップに圧倒されましたね。老若男女みんな同じラップを吹いているのは興味深いです。

庶民が生んだ音楽文化

奥中：浜松まつりのラップは、明治時代に消防団で使用していた信号ラップを使ったことが始まりとされています。昔は青年団と消防団を兼ねていて、地域の若い人がそれに入ります。風を揚げる時、何か賑やかに鳴るものはないかと身近にあるものを見回して、消防組の壁にかかっていた消防のラップを持って風場に出掛けたのが始まりだと思っんです。それで風場で吹いたら盛り上がった。

坪内：お祭りにラップって不思議だと思っっていたんです。ラップは軍楽隊とか戦いの場でも演奏された楽器なので、平和の象徴ともいえるお祭りとはミスマッチな気がして、手近にあったものを使い始めたということなんです。

奥中：はい。子どもの成長を祈願する初風の他に風合戦もあるので、戦の様相を呈する場面にラップの勇ましさマッチしたのでしょう。浜松は楽器メーカーが多く『楽器の街』と言われていますが、浜松まつりのラップは、ピアノやヴァイオリンなどの楽器を『持たない人』が生んだ文化なんです。浜松は染色や帽子、国鉄の工場などいろんな製造業で栄えた街です。労働者の音楽というのが重要で、ピアノ工場ではピアノを

作っていても、工員がピアノを弾いたり所有しているわけではなかったのです。

柴田：ブルースのはじまりみたいですね。奥中：そうですね。ブルースは、スペイン人が弾いていたギターを黒人が真似て、針金などの自作ギターで演奏したのが始まりです。持たない人が工夫して始まった音楽という点で似ていますね。坪内さんが研究していた樽帖も、楽器を持たない人の音楽ではないですか？

坪内：はい。醤油やお酒を入れていた容器を地面に置いて叩いて、その周りで踊っていたんです。

奥中：誰が始めたんだろう？偉い大名はないよね。
坪内：最古の記録は庶民の盆踊りを描いた絵巻物なのですが、それを描かせたのは奉行でした。次第に広まっていったように思います。



奥中 康人 教授
文化政策学部 芸術文化学科

奈良県出身。近現代の日本音楽史やラップだけではなく、ムード歌謡やご当地ソングなど興味範囲は幅広い。その土地で独自の進化を遂げた文化が好き。音楽史の授業では、方言や地域性などの話をするこも。

坪内：浜松まつりに参加する人だけではなく、参加しない人にとっても誇れる文化になるといいですよ。浜松は、お祭りが好きな人と苦手な人に分かれているように思います。

奥中：実際、祭りの運営には課題も多いんですよ。年齢も職業もまちまちなら考え方もそれぞれで、浜松に限らず、多くの地域でそうした課題を抱えています。

坪内：そうした問題を知っていると、人に勧めにくくなってしまっのかもしれないですね。せつかくの面白い文化なのに。

奥中：外から来た人はコミュニティに入りづらいですし、二分しますよね。SUACは教員も学生も他県から来る人が多く、学内は浜松であって浜松ではない空間です(笑)。家と学校とアルバイト先の三角形の中だけで四年間を過ごすのは少し寂しいですよ。ぜひ遠州弁を話す地元の人たちとふれ合ってほしいと思います。私の研究室にはラップと法被・足袋をいくつか用意していますので、興味があればいらしてください。

柴田：早出町のラップ隊では、お祭り直前の一ヶ月間、夜の1時間ほどは毎日練習をしました。アルバイトなどで忙しいと参加が難しいので、私のように入学直後に参加には最適かもしれません。楽器の経験がなくても、一ヶ月練習すれば吹けるようになります。

坪内：私が勤めているここ楽器博物館では、2024年1月から5月7日まで、ラップの企画展を開催しますので、こちらにも足を運んでほしいと思います。浜松のラップ文化を、多くの人に知ってほしいですね。

企画展 「響き渡る日本にやってきたラッパ」

唇を振動させて音を出す「金管楽器」。日本では「ラッパ(喇叭)」と言われ、現在ではお祭りやイベントでも使用されるポピュラーな楽器です。
本展では、ラッパがいつ・なぜ日本にやってきたのか、そして、どのように受け入れられ発展していったのか、日本におけるラッパの歴史について、史実とともに紹介します。
関連コンサートやワークショップなども開催されます。

- 会期** 2024年1月13日(土)～5月7日(火)
- 開館時間** 9:30～17:00
- 会場** 浜松市楽器博物館 展示室内
- 観覧料** 入館料でご覧いただけます
- 主催** 公益財団法人浜松市文化振興財団/浜松市



Check! 企画展と関連イベントの詳細は、「浜松市楽器博物館」Webサイトをご確認ください。
▶▶ <https://www.gakkihaku.jp/event/rappa/>



令和6年度 「浜松まつり」

有名な凧揚げ合戦は、中田島砂丘近くの凧揚げ会場を舞台に開催。子どもの誕生を祝う初凧が天高く揚げられます。夜は市の中心部を舞台に、絢爛豪華な御殿屋台が優雅で幻想的な美の競演を繰り広げます。
期間中はイベントも開催され、全国から観光客が訪れます。



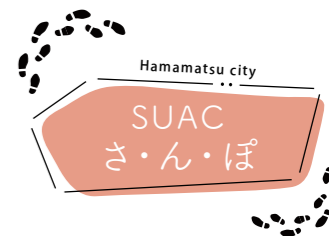
写真提供:浜松・浜名湖ツーリズムビューロー

開催期間 2024年5月3日(金)～5日(日)

〈主なイベント〉

イベント名	会場	開催日	時間
凧揚げ合戦	中田島凧揚げ会場	5月3日(金)～5日(日)	10:00～15:00
子ども凧揚げ	中田島凧揚げ会場	5月5日(日)	10:00～12:00
吹奏楽パレード	市中心部会場	5月3日(金)	17:10～18:30
御殿屋台引き回し	鍛冶町通り周辺	5月3日(金)～5日(日)	18:30～21:00
にぎわいイベント行事	市中心部・アクティシティ浜松ほか	5月3日(金)～5日(日)	時間はイベント毎に異なる

Check! 最新情報は、「浜松まつり公式Webサイト」で随時更新しています。
▶▶ <https://hamamatsu-daisuki.net/matsuri/>



【特別編】

浜松まつり
各町凧印編

江戸時代から続く浜松の凧文化。「凧印」とは、大凧合戦で各町の凧に描かれた文字や図柄のことで、そのいわれは、町名に由来するものや町内の団結を強めるものを中心となります。デザインとして見ても面白いものばかり。ここではSUAC周辺の10町を紹介しします。



9 松江町 (まつえちょう)

凧印は「本馬込町」時代からの氏神白山神社の社紋「右三ツ巴」。区画整理に伴って世帯数が最小の7となったが、苦境を乗り越えて参加している。



7 馬込町 (まごめちょう)

大正4年、天皇陛下御即位と戦勝を記念して、参加者が全員奴姿に変装して行列した。行きも帰りも沿道の観客に人気を博したことで、大正5年から現在の奴の絵を使用している。



5 早馬町 (はやうちょう)

凧印は大正時代まで「ひよっこ」だったが、その後現在の「は」の字と矢の図柄に変更した。浜松まつりの初期から参加している。



3 八幡町 (はちまんちょう)

明治時代から八幡町の凧印は提灯にある親子の鳩で、ハの字を表し、「鳩ハ」と言われていた。昭和初期に太陽に向かって羽ばたく現在の凧印になった。



1 野口町 (のぐちちょう)

野口は曳馬野(ひくまの)の入口にあたることされている。凧印は、野口町の頭文字を平仮名で表したものだ。



10 板屋町 (いたやまち)

「わつなぎ」印と呼び、輪は「人の和に通じて町民仲良くするもの」であり、つながった輪の両端が切ってあるのは、限りなく続くという意味。



8 新町 (しんまち)

米の仲買人が多かったため、「※(江戸時代の米の商標)」の図案を用いていたが、その後「七転び八起き」の諺にあやかって「だるま」に変更した。



6 東田町 (ひがしたまち)

田町・北田町と共に、田町の稲荷神社の氏子だったため、稲荷神社の宝珠と東田町の「東」を組み合わせた凧印。



4 常盤町 (ときわちょう)

常盤町組の組員が、和をもって結びついていることを表すために、「ト」に輪つなぎを描いたものと思われる。



2 船越町 (ふなこしちょう)

町の西側を流れる馬込川の中流にあり、渡し船の仕事をしてきた人たちが居住していた。その由来にちなみ地名で、凧印も「船」を取り入れている。

協力:アクト地区自治会連合会

TOPIC
03

SUAC産学連携

デザインと発想で 浜松のバレンタインを盛り上げる!

全学カリキュラム「自主課題演習」の一環として、浜松市にある遠鉄百貨店が主催するバレンタインイベントに若者層をさらに取り込むためのプロジェクトが発足。「若者にとっての百貨店」という原点的な定義設定から検討し、若者にとって最適なプロモーションの施策を提案。学生たちの専門分野を活かしながらアイデアの発想と制作物のビジュアル(広告)制作を行いました。ビジュアルデザイン案は、百貨店社長・経営層へのプレゼンテーションを経て、Instagram有料広告(静岡県西部限定)と百貨店内デジタルサイネージに掲出されました。



TOPIC
04

広がる! 地域をフィールドにした学び

学生団体「引佐耕作隊」による
「久留女木の棚田」での
米の脱穀が完了しました



学生有志団体「引佐耕作隊」は、2016年度から浜松市浜名区引佐町にある「久留女木の棚田」で米作りに取り組んでいます。2023年度は480平方メートルの田んぼ(3枚)で1年から4年の15名が1年を通して米作りに取り組み、無事に脱穀まで完了しました。1月には学内生協にて「久留女木 棚田の恵」として販売。5種類のパッケージデザインはデザイン学部の学生が担当しました。棚田には、お米を生産すること以外にも多数の機能があります。例えば、天然のダムとなることで土砂崩れを抑制する機能、多様な生物の住処となる機能、さらには田植え体験や稲刈り体験を通じて都市農村交流の場となる機能が挙げられます。これらの機能をまとめて「棚田の多面的機能」と呼んでいます。



◀ 殿岡家が所蔵する古文書の調査と報告会(川根本町)



◀ 公認サークル「書法倶楽部 彩筆會」が小学生向けの書き初め講座(浜松市)



◀ 国登録有形文化財「旧田代家住宅」を会場にした七夕祭り(浜松市)



◀ 公認サークル「Enjoy Arts Project」が小学生向けのクリスマスアート制作をサポート(浜松市)



▲ イオンモール浜松志都呂で学生プロデュースのファッションショー(浜松市)

SUAC 公式サイト

Webサイトでも本学の教育・研究や在学学生・卒業生の活躍など、トピックスをご紹介します。

<https://www.suac.ac.jp/topics/2023/>



SUAC 公式X(旧Twitter)

公式X(旧Twitter)アカウントでは、日々の学内での出来事やイベントなどをご紹介します。



@suac_official

TOPIC
01

デザイン学部卒業生・藤田結花さんの作品が 「第86回新制作展」新作家賞を受賞!

公募展「第86回新制作展」(主催:新制作協会)において、デザイン学部の卒業生、藤田結花さんの作品が新作家賞を受賞しました。受賞作品は、藤田さんが2022年度卒業制作作品として制作したもの。「新制作展」には絵画・彫刻・スペースデザインの三部門があり、今回藤田さんが受賞したのは彫刻部門です。優秀作品には協会賞、新作家賞が贈られ、それぞれの部門の入選作品が「新制作展」として国立新美術館で展示されました。



コンセプトは「内界の吐露」。▶ガス溶接のみで鉄を少しずつ溶かし、積層させる、藤田さん独自の手法。

藤田さん
受賞コメント

卒業制作作品が新作家賞を受賞したことに、驚きと喜びでいっぱいです。長い時間をかけて制作した思い出深い作品が認めていただけて、大変嬉しく思います。今回の受賞で、この先も作品制作を続けていきたいという思いが強くなりました。より魅力的な作品が作れるよう、精進して参ります。

TOPIC
02

浜松市・中野市長との懇談会「市長と話そう」に 国際文化学科・二本松ゼミが参加



浜松市長と市民がランチなどを一緒にいただきながら会話を交わし、情報交換をする「市長と話そう」。2023年5月に中野祐介市長が浜松市長に就任して初めての開催に二本松ゼミが参加しました。二本松ゼミでは、2014年度より浜松市北遠地域で昔話の採録調査をおこなっています。採録した民話は「語りのまま、方言のまま」に翻字され、学生たちによる地域の解説とあわせて書籍にまとめられ、毎年、出版してきました。今回参加した学生たちは、それぞれが調査をおこなった際の思い出や調査への思いを話しました。中野市長からは「学生の皆さんの活動を通して地域が元気になる。素晴らしい活動なので今後もぜひ継続してほしい」と励ましの言葉をいただきました。

Yoshie Kobayashi

【研究分野】
女性の
ライフコース/
政策/地域福祉



「ライフコース研究」で 障害福祉に貢献

小林 淑恵 准教授

文化政策学部 文化政策学科

□「やりぬく力」を
培った幼少期

東海道の宿場町、静岡市丸子の自然豊かな環境で伸び伸びと育ちました。習い事はピアノや油絵などに親しみましたが、4月生まれの私は、同級生の中でも足が速く、中学校でバレーボール部の部長を務めるなど活発な子供時代でした。今振り返ると、当時のバレー部はとても厳しく、その活動からいわゆる「GRIIT(グリット)やりぬく力」が身についたと思います。それは現在の研究活動にも大いに役立っています。

高校は当時、県下の進学校で男女比が3:1と決まっていた。その後も男子生徒は4年生大学へ進学、女子生徒の進学先は東京の短大か地元の国立大学かというままだまだジェンダーバイアスが色濃い時代でした。東京への憧れもあってデザイン系の短大に進んだのですが、卒業後の働き方に疑問を感じ4年制大学へ進学しなおしました。この頃から「女性の生き方」についての疑問や関心が膨らんできました。

□「追跡調査」に取り組み

大学では経済学に関心を持ち、特に労働経済から派生した家族や教育の経済学、また隣接する人口論を深く学ぶことになりました。「人を追跡する調査(パネル調査)」は米国では「60年代」、日本では「90年代」から盛んに行われるようになった手法で、同一出生集団(コホート)に対して継続的に追跡を行い、そのデータを分析するプロジェクトに関わるようになりました。

大学院修了後は多くの修士課程が大学や厚生労働省の研究所でキャリアを積む中、私は縁あって文部科学省の研究所へ。省庁では様々な調査が実施されますが、当時文科省では、教育から社会への移行を把握する追跡調査は行われておらず、これまでの経験を活かして毎年1万5千人ほど誕生する博士課程修了者の追跡調査を開始し、博士のキャリアについての分析を行いました。また、「全国学力・学習状況調査」の実施やデータ公開にも携わりました。これらの調査は国家が持つ権限を用いてはじめて実施できるダイナミックな調査です。省庁勤務ということで、各種審議会に出席したり、国会答弁の後席に控えていたこともあり、大学長、研究機関長らとの意見交換、また国際機関への往訪などで「研究」と「政策」が絡み合う仕事は責任とプレッシャーが大きかった半面、様々

□「人のライフコース」を
研究する

本学には自由な研究環境を求め赴任しました。人は就職、結婚、出産、退職等のタイミングで人生における様々な選択を行います。娘にはダウン症という障害があることから本学では、これまでの研究経験を障害福祉分野にも生かしたいと思いい、科研究の助成を受け「障害者世帯のライフコース研究」に取り組んでいます。協力団体と

に貴重な経験ができたことは大きな財産です。

の連携も求められるなか、満足な調査が実施できるかはフタを開けてみないとわからないのですが、持ち前の「やりぬく力」を発揮し、必要な準備や思いづく限りのフォローを徹底するよう心がけています。静岡県との連携で展開している「障害者文化芸術活動支援」では、文化政策、デザイン両学部の学生が参加しています。この活動から「福祉」では政策分野はもとより、デザイン分野への広がりにより、デザイン分野があると感じています。デザイン学部の学生にもこの可能性に気付いて欲しいですね。

Profile

静岡市出身。慶應義塾大学大学院経済学研究科を修了後、文部科学省科学技術・学術政策研究所上席研究官、同省総合教育政策局調査企画課学力調査分析専門職を経て2021年より現職。授業では「社会統計分析」「地域福祉論」「文化政策演習Ⅰ～Ⅴ」などを担当。



小林先生が選ぶ一冊

「非認知能力:概念・測定と教育の可能性」

著:小塩真司

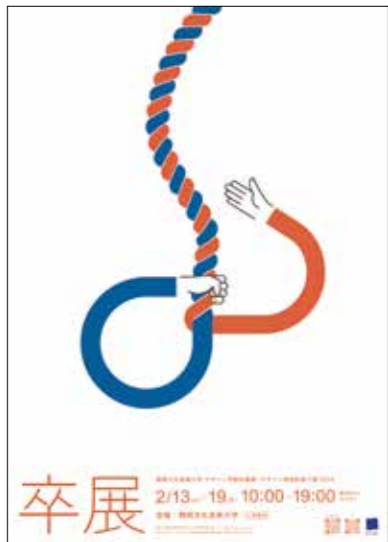
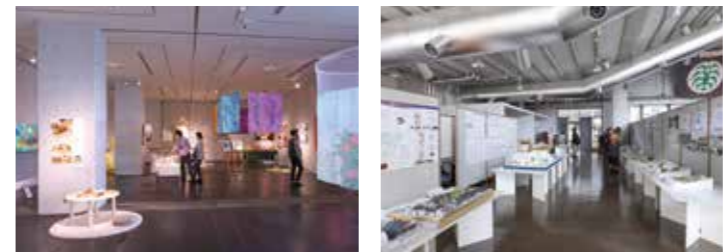


非認知能力と言われる力が教育政策でも重視されるようになってきています。非認知能力とは、教育心理学の知見から得られた「誠実性」、「グリット」、「好奇心」、「自己制御」、「楽観性」、「レジリエンス」など関連する15の心理特性で、本書では教育や保育の現場でそれらを育む可能性を展望しています。「どのような力を育むのか」という教育の根本的な問いに答え、今後の教育政策の方向性を知ることができる一冊です。

TOPIC 05

4年間の集大成! 「卒展」を開催しました

デザイン学部・大学院デザイン研究科の学生たちの学びの集大成である卒業制作と修了制作が展示される「デザイン学部卒業展・デザイン研究科修了展(通称:卒展)」。準備と企画運営はすべて学生たちでおこなわれます。ギャラリーや講堂など学内施設全体が展示会場となり作品が並びました。デザインを学ぶSUACだからこそ生まれる多種多様な作品の数々。多くの来場者の皆さんにご覧いただきました。



TOPIC 06

SUAC産学連携

浜名湖花博2024(フラワーパーク会場)の チケットデザインを制作



2024年3月23日～6月16日まで静岡県浜松市で開催される「浜名湖花博2024」。今回受託事業の一環として、高山靖子教授(デザイン学部)と学生5名が「フラワーパーク会場」のチケットデザイン制作と写真映えスポットアイデア提案を行いました。

学生たちは会場となる「はままつフラワーパーク」に足を運び、四季折々の花々やその景色を観察するとともに、来場者を注意深く観察して発想を広げ、現地調査や考察をもとにディスカッション。チケットデザインの市場調査等を経て、5案のチケットデザインを提案しました。

採用されたのは、同園のマスコットキャラクター「ふるまる」の顔の下半分が花々で描かれ、口元にあてると「ふるまるになれる」、思わず写真に撮りたくなる案。チケットを手に、来場者が花々を楽しんでもらえることを期待します。

浜名湖花博2024

チケットや詳細は
公式Webサイトをご確認ください。

浜名湖ガーデンパーク会場 | 2024年4月6日📍～6月2日📍

はままつフラワーパーク会場 | 2024年3月23日📍～6月16日📍

SUACキャリア支援室では、学生生活を通して将来への希望が実現できるよう、様々な就職支援をおこなっています。

4年次

企業説明会

面接練習

履歴書・エントリーシートアドバイス



keyword

オンライン選考

コロナ禍を経て、採用選考の方法のひとつとして主流になったオンライン。適性検査をはじめ、面接をオンラインでおこなう企業・団体もあります。キャリア支援室では、専用個人ブースを用意。通信状況に不安なく、音声や映像も明瞭な環境で、安心して選考に臨めます。



▲個人ブース

3年次

個人面談

- 職員が3年生全員と面談を実施し、進路の意向を確認します。

学内企業説明会

- 企業の採用担当者を招き、会社概要などを説明してもらいます。OB・OGが参加する機会も多く、生の情報を得ることが出来ます。

模擬面接・グループディスカッション講座

就職ガイダンス

業界研究セミナー

keyword

インターンシップ

企業・団体が提供する実務体験を伴う5日間以上のプログラム。その仕事に就く能力が自分に備わっているかを見極める機会になる。採用の評価に直接関連することも。学部3年以上が対象。



keyword

オープン・カンパニー

これまで「1dayインターンシップ」「仕事体験」などと呼ばれていたプログラム。企業の文化や環境を体感する場であり、実際の業務経験は目的とされていない。すべての学年が対象となる。



2年次

低学年向けガイダンス

- 就職活動に必要な知識や対策などを、座学と実践を組み合わせる説明。1年次から年間を通しておこなっています。

ポートフォリオ制作ガイダンス



keyword

ポートフォリオ制作(デザイン学部)

デザイン系職の就職活動で欠かせない自己PRツール。自分の作品(成果物)をまとめ、企業の採用担当者に示すためのプレゼン資料となります。早めに準備を始めることが大切です。



1年次

2023年度卒業生・21期生

就職状況

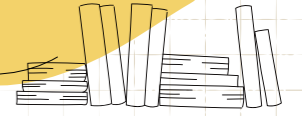
2024年3月卒業予定者(現4年生)については、2月15日時点での内定率が87.3%となっています。昨年度同様、就職活動は売り手市場となっており、多くの学生が複数の内定を得ています。一方、未内定の学生に対しては、志望の状況に応じた求人情報の提供等により最後まで支援を継続していきます。

また、2025年3月卒業予定者(現3年生)については昨年度以上に採用活動の早期化が進んでいる印象です。

次年度以降も今年度と同様の状況を見込んでいますが、状況の変化に即したガイダンスやセミナーの実施と個別のきめ細やかな対応によって個々の力を引き出し、学生一人ひとりの志望が実現できるよう支援していきます。

キャリア支援室より

Career Support Office



就職イベントの実施



3年生との個人面談

6月から7月にかけて、キャリア支援室職員が3年生全員と個人面談を実施しました。

志望する進路(業種、職種、勤務地等)や就職活動に向けての準備状況等を確認し、目指す方向に応じた活動のポイントを説明したり、学生からの質問に答えたりしました。

昨年度から個人面談の時期を早めることで、夏休みを有効活用できるようアドバイスを行っています。また、これを機会に学生がキャリア支援室を気軽に利用して、それぞれの就職活動に役立ててもらえることを願っています。

保護者会

11月4日(土)、碧風祭の開催に合わせて1~3年生の保護者の方を対象にして、学部別の保護者会を浜松市地域情報センターにて実施しました。

SUAC生の就職活動状況報告や、保護者の方から寄せられた質問への回答、教務・学生室による授業・留学・学生支援等についての説明の後、文化政策学部は「就職活動の動向」、デザイン学部は「デザイン職の就職」というテーマで、講演を行いました。

後半は卒業生や在学生によるパネルディスカッションで、就職活動について詳しくお話を伺いました。質疑応答の時間には、熱心な保護者の方から多くの質問をいただき、「卒業生の生の声を聞いて良かった」等の感想もいただきました。



ご意見・ご感想をお寄せください

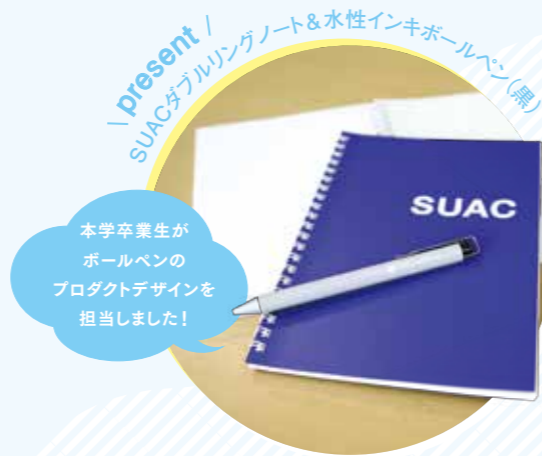
広報誌に関するアンケートにご回答いただいた方の中から
抽選で5名様^{*}に大学ノベルティグッズをプレゼントします。

応募方法

2024年4月30日(火)までに、二次元コードより
回答アンケートフォームにアクセスし、
回答してください。

※当選者の発表はプレゼントの発送をもってかえさせていただきます。

コチラから
アクセス



静岡文化芸術大学同窓会だより

「碧風祭2023」

Home Coming Day

2023年11月5日(日)開催

2004年以来、碧風祭は卒業生が大学に集う日です。今年度は、卒業生の活躍を卒業生はじめ在校生や地域の皆様にもご紹介するため、曾根光揮さん(デザイン学部卒)の講演と的場教授・和田教授を交えての対談をお届けしました。

卒業証書・修了証書ホルダーの贈呈

同窓会では、卒業生・修了生の皆さんに卒業証書・修了証書ホルダーを贈呈しています。本学の証書ホルダーは、内側の台紙にフェアトレードペーパー(バナナペーパー)を使用した大学オリジナルです。卒業生・修了生のますますのご活躍を祈念しています。



同窓会の活動に参加してみたい卒業生を募集しています。日頃のご活躍もぜひお知らせください。/

コチラ▶▶▶ 静岡文化芸術大学同窓会 E-mailアドレス: dousou@suac.ac.jp

静岡文化芸術大学基金 (教育研究支援・修学支援事業) 寄附者ご芳名

2023年8月1日から
2023年12月31日まで

ご寄附を頂戴した方々のご厚意に心から感謝を申し上げますとともに、
謹んでご芳名を掲載させていただきます。今後、学生の修学支援、国際
交流推進、図書購入等に充てさせていただきます。皆様には引き続き
ご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

寄附金額 1,588,500円

(内訳:教育研究支援1,382,500円、修学支援事業206,000円)

寄附者ご芳名

(五十音順、敬称略)【個人】

浅川卓司 金節子 熊田洋之 芸文中村ゼミ同窓有志 小久保元弘 紺谷淳子
佐藤あつ子 佐藤寿晃 佐野百合子 下位智 杉本香代 杉山秀雄 高橋玲子
坪井隆浩 永井良和 中谷紀美 福田浩子 藤川智子 星原守雄 松田尚純
松本賢太郎 村松秀人 矢ヶ崎満郎 山田亜希子 山田智也 横山俊夫

※ご芳名の掲載を希望されなかった方(28名)を除いて掲載しております。



基金について

退任教員紹介

RETIRED FACULTY

文化政策学部 国際文化学科 教授
国際協力/NPO・NGO

在職期間:2010年4月 ▶ 2024年3月

下澤 嶽

静岡文化芸術大学で働いた13年間で一番印象的なのは、バングラデシュのチッタゴン丘陵に学生が休学して、日本語ボランティアとして長期滞在したことです。3年間で3名の学生が、それぞれ1年間ずつここで過ごしました。この地域は私の研究のフィールドでもあり、実践の場でした。民族対立の厳しいこの場所は危険レベル2であり、通常から考えればあり得ない長期滞在だったと思います。その後、ここにかかわった2名の学生は、難民のNGOやバングラデシュで会社を立ち上げました。そして、もう一人は、私が立ち上げたチッタゴン丘陵を支援するNGOの責任者になりました。一番伝えなかったものを受け止めてくれた学生たちでした。



▲チッタゴン丘陵の寄宿学校の生徒たちと

デザイン学部 デザイン学科 教授
メディアアート

在職期間:2000年4月 ▶ 2024年3月

長嶋 洋一

2000年4月のSUAC開学(実質的にはその2年前から静岡県設立準備財団とカリキュラム作成作業に参加)からマル24年間、SUACで学生と共に私も大きく成長させていただきました。SUAC教員として行ってきた国際会議発表/学会発表/レクチャー/ワークショップ等を数えてみると258回※1になり、社会人博士としてPh.Dも取得しました。最終講義イベント(学長/副学長も来訪)の記録※2に成果をまとめていますので参照して下さい。ありがとうございました。

※1 <https://nagasm.org/ASL/ASL.html>

※2 <https://nagasm.org/1106/MDW2024/report.html>

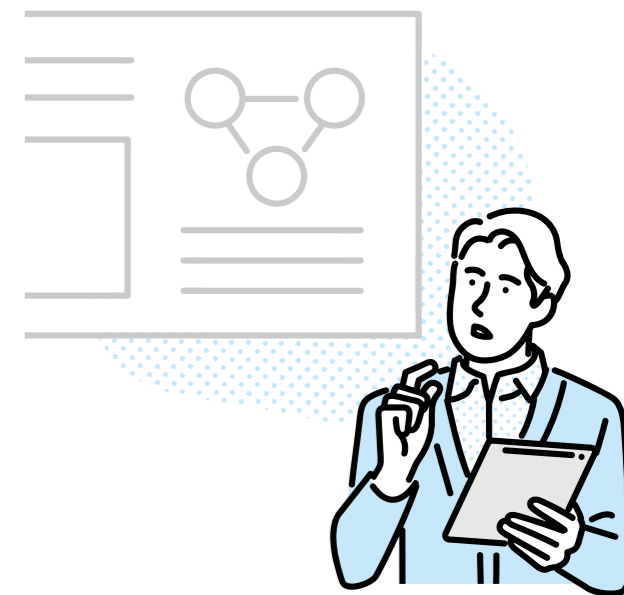


文化政策学部 芸術文化学科 教授
芸術文化政策/財政・公共経済

在職期間:2006年4月 ▶ 2024年3月

片山 泰輔

半学半教をモットーに、素晴らしい学生たちと一緒に学び、研究した18年間は、これまでの人生で最も充実した時間でした。学生たちは文化政策の先駆者としての自覚を持って意欲的に研究に取組み、学会等の対外発表も積極的に行い、卒論・修論をもとにした10本近いゼミ生の論文が学会誌に掲載されました。研究室OBOGは100名を超え、文化施設等、全国の様々な現場の第一線で活躍しており、その姿や評判に触れるたびに幸福感を味わっています。素晴らしい教育・研究環境をご提供いただいた教職員の皆様に心から感謝申し上げます。4月からは、SUACに日本初の文化政策学部が設立された8年後に誕生した都内の文化政策系学部で、タイプの異なる学生たちに向けた文化政策教育に従事します。SUAC卒業生の良きライバルかつ同志となる人材を育てていきたいと思っています。





SUAC'S OB

卒業生の活躍

PROFILE

有限会社春華堂
広報室

おおつか りこ
大塚 莉子さん

□ 2020年 文化政策学部国際文化学科 卒業

愛知県蒲郡市出身。2020年、文化政策学部国際文化学科卒業。在学中は学内外でフェアトレード推進活動に取り組み、SUACの「フェアトレード大学」認定に尽力。卒業後、生活に身近な食に携わる仕事に就きたいと、浜松の老舗企業「春華堂」に入社。現在はSNS運用やメディア取材対応のほか、食育講座や県外の新店舗開発プロジェクトなど、多岐の業務に携わる。

原点はフェアトレード活動 浜松発、食を通じて日本を元気に

愛知県蒲郡市で育ちました。学芸会の演劇ではいつも主役を務める目立ちたがり屋で、将来の夢はアナウンサー。高校に進学すると、洋楽や映画の影響で海外に憧れ、英語部に所属。地域イベントに参加する活動に携わり、表舞台よりもそれを支える裏方に興味を持ちました。人を笑顔にするメディアを作る側に興味が広がり、大学選びの軸になりました。SUACは地域との取り組みや、それを応援してくれる大学の体制が魅力で、入学後の活動イメージが自然と思いついたことが決め手となり、4年間自宅から通学しました。

入学してすぐに出会ったのが「TABEBORA(タベボラ)」。国際文化学科の先輩が立ち上げた、フェアトレードや地産地消の食材を使った料理のカフェを運営するサークルです。カフェという形態によって、多くの人にフェアトレードを知ってもらうのが狙いです。すぐに「面白そう!」と飛びついた私でしたが、フェアトレードについては言葉を知っている程度でしかかりと理解はしていませんでした。週2回、JR浜松駅前地下広場にカフェを出店し、立ち寄ってくれたお客様にフェアトレード活動についてお話することで私自身も理解を深め、誰もが入りやすい「カフェ」を通じて交流が生まれていきました。SUACでは、言語が用いられる文化的な背景や、多文化共生を学んだことなどが印象に残っていますが、4年間を振り返ると「フェアトレード」一色の大学生活でした。中でも、タベボラのメンバーで「タベボラ留学プロジェクト」を立ち上げ、国内外の食材の生産者に実際に会いに行ったことは貴重な経験となりました。現地の労働環境や住環境はさまざま、生産者から直接お話を伺って初めて知ることもありました。この姿勢は現在の仕事にもつながっていて、お菓子の原材料を扱う生産者や、お菓子をお買い求めになるお客様の声を聴く機会を大切にしています。

2017年にSUACが「フェアトレード大学」に認定される際には、前段階のフェアトレード大学憲章の作成から携わりました。2018年にはフェアトレードカカオを使ったチョコレートを作るプロジェクトがスタート。しかし、私の卒業時はコロナ禍となり、プロジェクトは一旦休止せざるを得なくなりました。その後、後輩たちが思いを引き継いでくれて、代表が3代目となった2022年1月に「ピナッショコラ」が完成。私も協力会社の一員として学生と同じ気持ちで参加しました。商品としてお菓子をつくるときには、原材料をはじめ設備や人件費などが必要となり、パッケージも意味を持たせたものでなければなりません。そういった社会人になったからこそ学んだ知識や経験を、活かすことができたと思います。

タベボラから始まったフェアトレード推進活動で、浜松の多くの方と出会い、支えていただいたからこそ、今の私があると思っています。春華堂を代表する「うなぎパイ」も地元の人たちに育てていただいたお菓子です。それを守りながら、首都圏進出など新しいことにも挑戦しています。春華堂は菓子製造業ではなく「創造業」。食によって人を笑顔にするさまざまな取り組みを通して、私自身も浜松に恩返しをしながら、日本全体を元気にしていきたいと思っています。



学内でフェアトレードについての意見交換会を行った(右が大塚さん)

編集後記

2024年3月、コロナ禍真っただ中で入学した学生たちが卒業していきます。入学直後の休校、オンラインでの手探りの授業など、先の見えない不安も多かったことでしょう。それでも思い描いたキャンパスライフに向かって、教職員と一緒に取り戻してきたこの4年間。“同志”たちの卒業に心からおめでとう!

広報誌に対するご意見、ご感想をお待ちしています。第19号は2024年10月の発行予定です。